様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 ２５ 日現在

機関番号：１４３０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｈ０１４０４

研究課題名（和文）太平洋戦争激戦地における歴史記憶を創出する「場」の人類学的研究

研究課題名（英文）Anthropological Study of "Ba"(Places) for Emerging Historical Memory in the Pacific War

研究代表者
風間　計博（Kazama, Kazuhiro）

京都大学・人間・環境学研究科・教授

研究者番号：７０３２３２１９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,300,000円

研究成果の概要（和文）：太平洋戦争の激戦地に残された戦跡や遺骨を取り囲む「場」が、現在を生きる人々の記憶を呼び覚まし、行動を駆動する様相について収集資料に基づいて考察した。具体的には、沖縄のガマにおける憑依現象、ガダルカナル島の遺骨収集、サイパンやペリリュー島の戦跡観光、タラワ島の慰霊を検討した。本研究では、戦争の残滓の所在する「場」で邂逅する人々（慰霊団、現地の住民、遺族、遺骨収容ボランティア等）が、戦跡を取り巻く環境のなかで、相互行為を反復し、過去の悲惨な出来事を想像し、悲哀の感情を喚起させ、ときに複雑な感情のなかで制御不能に陥いるという具体的な様相を明らかにした.最終年度に、研究成果を含む論文集を刊行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来のナラティヴ研究において、主に直接経験者から聞き取りを行ってきた。しかし、太平洋戦争から80年を経た現在、体験を語れる人物は姿を消しつつある。現状に鑑みると、間接的知識しかもたない人々を対象とした記憶の継承を考える必然性が生じる。そこで本研究では、太平洋戦争の旧激戦地の遺物を含む「場」において、非経験者がいかに記憶を創出し感情を喚起するかに注目した。また、本研究ではモノ･環境研究の理論的枠組みを援用しながら、感情と歴史記憶研究に関わる具体的事象を分析し、再び理論に立ち戻って考察する。こうした人類学における領域横断的な研究を往還して探究する視座において、本研究の学術的意義を見出せる。

研究成果の概要（英文）：This study examined how the "places" (ba in Japanese) surrounding the battle sites and remains in the fierce Pacific War evoke memories and emotions of people living in the present. Specifically, we analyzed the possession of old soldiers in Okinawa, an association that travels Guadalcanal in Solomon Islands to gather the remains, tourism at the old battlefield on Mariana Islands and Peleliu in Belau, and memorial monuments on Tarawa in Kiribati. In this study, we have revealed specific aspects of how people (i.e., memorial groups, local people, families of soldiers, volunteers for gathering remains, etc.) imagine past tragic events, arouse feelings of grief, and sometimes upset in the mixture of emotions in the “places”.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学　歴史記憶　想起　場　太平洋戦争　慰霊　激戦地　感情

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

第二次世界大戦が終結して 80 年近くの歳月が過ぎた。日本では毎年 8 月に戦争関連の報道が喧しく流される。しかし、本土の日常生活において、私たちが戦争の残滓に触れる機会はほとんどないといえる。第二次世界大戦当時を直接知る人々のほとんどが、すでに鬼籍に入った。戦後復興と高度経済成長期を経て、日本本土の空襲や軍事施設の痕跡のほとんどが、消却されたためである。したがって、私たちは、主に記録映像や書き記された文章を通じて知識を得、自ら体験していない戦争を想像することしかできない。このとき、戦争の記憶継承のあり方が、国内のみならず対外的にも重要な課題として浮かび上がってくる。

かつて 1990 年代半ばから 2000 年代にかけて、日本のみならず世界各地で「記憶論」が注目され、それと並行して、ライフストーリー研究が活発化した。第二次世界大戦後、50～60 年を経た当時、戦争の直接体験者が徐々に減少してゆくなか、直接的な記憶が失われる前に、生の語りの記録を残す必要性に迫られたことが、「記憶ブーム」の隆盛した理由のひとつとして考えることが可能である。さらに 30 年もの歳月を経た昨今、悲惨な沖縄戦や広島･長崎原爆の直接体験者である語り部が引退した後、新たに非経験者の語り部が登場している。ただし、ここでひとつの疑問が生じ得る。非体験者による記憶の継承は、いかなる根拠により、どこまで正当性をもち得るのであろうか。

21 世紀に入って、既に四半世紀が経過しつつある。こうしたなか、ますます記憶継承が困難に陥るという現実に、私たちは直面する事態になった。時間の経過による歴史記憶の継承不全やその全き忘却は、悲惨な戦争の反復が止まらない「歴史的経験の敗北」を招来する不穏な可能性を含むものである。直接経験者の不在状況において、膨大な数の死をもたらした戦争という激烈な出来事であっても、歴史記憶は忘却されて、容易に消滅してゆくしかないのだろうか。本研究では、太平洋戦争激戦地における、戦闘の残滓を取り囲む環境（地形・植生・気候等を含む）に焦点を当て、歴史記憶研究の新たな展開を目指した。

２．研究の目的

本研究の目的は、太平洋戦争の直接経験者が消えつつある現在、太平洋島嶼部や沖縄に遺された戦争の残滓を取り囲む環境が、現代の人々をいかに惹きつけ、感情を喚起させ、多様な行為を駆動させながら、いかなる特異な「場」を生成してゆくのかを追究することである。

本研究における具体的な対象地として、太平洋戦争の日本軍玉砕地であるキリバス北部環礁（タラワ守備隊等 4,800 人中、4,690 人戦死）、ソロモン諸島ガダルカナル島（上陸兵 31,400 人、戦闘の死者 5,000～6,000 人、餓死・病死者 18,000～19,000 人）、非軍人を地上戦に巻き込み、膨大な数の死者を出した沖縄（死者総数 200,656 人中、一般人の死者 94,000 人）、マリアナ諸島サイパン島（日本兵戦死者 41,000 人；日本人移民 20,000 人中、死者 10,000～12,000 人）等、ミッドウェー海戦以降、敗戦に至るまでの重要な激戦地を選定とした。

これら激戦地では、少なくとも日本の本土で消去された状況に比較すれば、戦闘や人間の死を直接的に示す物質的な残滓がそのままの形で鎮座している。また、鎮魂や平和祈念のための人工物（石碑や立像等）が建立され、その近傍で式典や儀礼が執り行われてきた。それらを含む「場」の力学の在り様を解明することが、本研究の要諦である。

３．研究の方法

本研究の当初の予定では、沖縄、サイパン、キリバス、ソロモン諸島等、太平洋戦争の激戦地に遺された残滓や廃墟、慰霊碑等を取り囲む複数地点において、法要や式典等に参加してメモを取り、映像を記録し、関係者への面談調査を行うほか、必要に応じて、ミクロネシア連邦のチューック州やマーシャル諸島等において、戦闘や慰霊に関わる補足資料を収集することを考えていた。さらに、世代交代している国内の遺族会や、戦友会等の活動記録の情報収集、国内外の激戦地跡における直接観察、関係者や地元住民への聞き取り、文書や映像等、既存のメディア記録、団体会報等を収集することを計画していた。

しかしながら、本研究の開始時点（2020 年 4 月）において、COVID-19 のパンデミックが地球規模で深刻な状況に陥っていた。国内外の移動の流動性は著しく低下し、当然ながら、調査のための海外渡航は不可能になった。とくに、本研究の中心である太平洋小島嶼国では、鎖国といっても大げさではないほどに厳しい入国制限が課され、長期間にわたり飛行機便が全く飛ばなくなった。さらに、日本国内の移動が制限されたことに加え、感染症に対して脆弱である高齢の情報提供者と対面で接触することは、ほとんど不可能になった。そのため、2020 年度と 2021 年度においては、本共同研究のメンバーは、過去の実地調査等によりすでに収集していた一次資料を再確認しながら、それらを対象として新たに分析を進めるという研究手法を選択することを余儀なくされた。また、図書館等を通じて購入可能な文書資料を新たに収集して、情報を補足することに努めた。

2022 年度に入り、ようやく移動制限が緩和され始めたため、可能な範囲で国内・国外における実地調査を再開することができた。同時に、並行して本科研のメンバー3 人を含む国立民族学博物館共同研究会「オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究」（代表：風間計博）において各自が口頭発表し、議論を重ねることにより、考察内容の精緻化に努めた。また、研究会において、太平洋戦争のみならず、多様な地域における紛争の記憶や、記憶形態に関わる研究を行ってきたゲストスピーカー等から刺激を受け、理論的な構想を進めることが可能となった。2022 年度末には、メンバー全員がそれぞれ論文を執筆した。2023 年度には、原稿の推敲を重ねたうえで、論集の出版準備を進めた。

４．研究成果

本研究において対象とした太平洋戦争の激戦地には、軍司令部の廃墟、水陸両用車や軍用機、戦車の朽ちかけた残骸、沈没船等の戦跡が、海辺や見晴らしのよい高台や海岸部、鬱蒼とした植生のなかで数十年の歳月を経て残されている。一方、日本の高度経済成長期には、各地の激戦地において、遺族会等の主導により、慰霊碑や平和祈念の石碑やマリア観音像等が建立された。そうした場所では、遺族会や戦友会によって、慰霊祭や式典が執り行われてきた。もう片方の当事者である米国側も、軍関係者の主導により、慰霊の式典を開催してきた。また、遺骨収容活動が厚生労働省の主導によって実施され、民間のボランティア団体も、戦争当事者の孫世代を取り込みながら、積極的に遺骨収容活動に参加してきた。

戦跡に関わる関係者の多様な実践や収集した文書記録等の分析を通して、特異な「場」の生成過程を追究しながら、新たな歴史記憶の創出･継承の可能性を探究し、さらには記憶の選択のあり方や、選択されざる記憶の消却に関する考察を加えた。慰霊ツアーや戦跡観光等による訪問者たちは、故郷から遠く離れたこの地で、兵士たちがなぜ激烈に殺戮し合い、壮絶な死を迎えるに至ったのか、いかなる最期を遂げたのか、複雑な感情とともに想像することを余儀なくされる。旧激戦地の岩や洞穴、廃墟や記念碑等は、佇む者の感覚や感情に働きかける。掘り出された掌上の遺骨や遺物は、感情に強く作用する。事例の分析により、戦跡や記念碑等を含む特異な「場」において、多様な感情的反応が喚起され、人々は突き動かされることが示された。こうした経験は、戦争と平和、国際情勢に関わる政治思想に強い影響を与え得る。

本研究で具体的に明らかにしたのは、第一に、戦争の残滓の所在する「場」で邂逅する人々が、戦跡を取り巻く環境のなかで、相互行為を反復し、過去の出来事を想像し、悲哀の感情を喚起させ、ときに複雑な感情を制御不能に陥いるという様相である。具体的には、日本兵の遺族等の日本から戦跡を訪れた慰霊団、現地在住の日本人や日系人、遺骨収容活動を行うボランティア等の諸活動を考察の対象とした。

第二に、環境のなかのモノと人間の関係に着目し、式典や遺骨収容活動、慰霊碑等の管理保全、多様な属性をもつ人々が集まる式典や慰霊を通じて、遺物や人工物が、人々を感情的に突き動かす様相である。一方、戦跡は、観光客のような戦争の直接的な記憶をもたない人々にとって、異国の風景の部分を構成する要素に過ぎない場合もあることがわかった。また、観光産業に関わる現地の人々にとっては、経済的資源という側面を強く有することがわかった。

第三に、慰霊碑等の人工物が建立されるに至った経緯の再構成である。そのとき、戦跡という意識をとくにもたずに日常生活を営む現地の人々の存在が、突如として前景化してくる。遺族や関係者にとっての戦跡は、現地の人々にとって外来の侵入者の残した負の物質的残滓として捉えられる可能性がある。そのとき歴史認識の齟齬を含みながら、現地の人々や行政機関、外来者の間で、政治的問題を孕んだ交渉が繰り返されることになる。

このように、太平洋戦争の直接経験者が不在になりつつある現在、旧激戦地における遺物･廃墟等の物を含む特異な「場」において、多様なモノと人々の相互作用が感情に作用し、新たな記憶の創出･継承に関わることになる。個別の立場によってある記憶は選別されて伝えられ、逆に残余は忘却されていくことになる。

このような考察に基づき、本研究においては、科研メンバー各自が雑誌論文や本の分担執筆等を多数公表した。最終的な成果として、メンバー４人を執筆者として含む論文集『記憶と歴史に人類学―東南アジア・オセアニア島嶼部における戦争・移住・他者接触の経験』（風間計博・丹羽典生編、風響社）を 2024 年 3 月に刊行した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 北村毅	４．巻 16
２．論文標題 戦死者の「憑依」を解きほぐす――「シャーマニズム」と「心霊」という二つの文脈から	５．発行年 2020年
３．雑誌名 日本オーラル・ヒストリー研究	６．最初と最後の頁 75-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Iitaka, Shingo
２．発表標題 Converted Memoryscape in a Former Mining Village in Palau, Micronesia: On the Way Local People Appropriate the Development Discourse by the Empire of Japan.
３．学会等名 Royal Anthropological Institute 2020: Anthropology and Geography: Dialogues Past, Presentand Future. Panel B06: Multi-disciplinary studies of 'islandscape' as a meshwork（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Iitaka, Shingo
２．発表標題 Shifting Memoryscape of the Pacific War: On Two Japanese Veterans’ Projects in Palau, Micronesia
３．学会等名 Contesting Memorial Spaces in the Asia-Pacific (International Conference hostd by Kyushu University Border Studies)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 北村毅
２．発表標題 沖縄のガマにおける集団憑依現象へのアプローチ
３．学会等名 国立民族学博物館共同研究会「オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究」（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計13件

1．著者名 蘭 信三、石原 俊、一ノ瀬 俊也、佐藤 文香、西村 明、野上 元、福間 良明	4．発行年 2022年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 258
3．書名 変容する記憶と追悼	

1．著者名 伊藤 詞子（編）　風間計博ほか（分担）	4．発行年 2022年
2．出版社 京都大学学術出版会	5．総ページ数 344
3．書名 たえる・きざす	

1．著者名 松尾　瑞穂（編）　深田淳太郎ほか（分担）	4．発行年 2023年
2．出版社 ナカニシヤ出版	5．総ページ数 370
3．書名 サブスタンスの人類学	

1．著者名 石森大知、黒崎岳大（編）　飯高伸五ほか（分担）	4．発行年 2023年
2．出版社 昭和堂	5．総ページ数 356
3．書名 ようこそオセアニア世界へ	

1．著者名 風間　計博	4．発行年 2022年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 424
3．書名 強制移住と怒りの民族誌ーバナバ人の歴史記憶・政治闘争・エスニシティ	

1．著者名 宮岡真央子、渋谷努、中村八重、兼城糸絵（編）飯高伸五ほか（分担）	4．発行年 2021年
2．出版社 昭和堂	5．総ページ数 280
3．書名 日本で学ぶ文化人類学	

1．著者名 Y. Mio (ed.), Shingo IItaka, et.al. (coauthor)	4．発行年 2021年
2．出版社 Routledge	5．総ページ数 204
3．書名 Memories of the Japanese Empire: Comparison of the Colonial and Decolonisation Experiences in Taiwan and Nan'yo Gunto	

1．著者名 丹羽 典生（編）風間計博ほか（分担執筆）	4．発行年 2020年
2．出版社 青弓社	5．総ページ数 332
3．書名 応援の人類学	

１．著者名 風間計博、梅崎昌裕 編	４．発行年 2020年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 304
３．書名 オセアニアで学ぶ人類学	

１．著者名 Kajimaru, G. C. Caitlin and K. Kazama eds.	４．発行年 2021年
２．出版社 Kyoto Univ. Press/ Trans Pacific Press	５．総ページ数 193
３．書名 An Anthropology of Ba: Place and Performance Co-emerging	

１．著者名 風間計博・丹羽典生（編）風間計博，北村毅，飯高伸五，深田淳太郎ほか（分担）	４．発行年 2024年
２．出版社 風響社	５．総ページ数 372
３．書名 記憶と歴史の人類学―東南アジア・オセアニア島嶼部における戦争・移住・他者接触の記憶	

１．著者名 月形歴史研究会（編）北村毅ほか（分担）	４．発行年 2023年
２．出版社 かりん社	５．総ページ数 600
３．書名 道産子たちの沖縄戦記　あゝ沖縄	

１．著者名 Edward Boyle and Steven Ivings (eds.); Shingo IITAKA , et al.	４．発行年 2023年
２．出版社 Brill	５．総ページ数 410
３．書名 Heritage, Contested Sites, and Borders of Memory in the Asia Pacific	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	北村　毅 (Kitamura Tsuyoshi) (00454116)	大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・教授 (14401)	
研究分担者	飯高　伸五 (Iitaka Shingo) (10612567)	高知県立大学・文化学部・教授 (26401)	
研究分担者	深田　淳太郎 (Fukada Juntaro) (70643104)	三重大学・人文学部・准教授 (14101)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関